

# はじめての 介護研究

テーマ 文献 計画  
データ収集・分析 発表



鈴木俊文

静岡県立大学短期大学部  
社会福祉学科 准教授

介護老人保健施設、認知症高齢者グループホームにて実務経験を重ねた後、日本福祉大学高浜専門学校専任教員などを経て現職。認知症ケア、ケアマネジメント、スーパービジョン、災害福祉、地域福祉活動などの現場研究を力点に、教育・研究・研修活動を展開。主な著書に『社会福祉・介護福祉の質的研究法』（共著、中央法規出版）、『災害時の介護』（共著、みらい）など。

## 挑戦しよう！ 研究発表

本連載は、全6回を通して介護研究の考え方、研究のプロセスや方法を解説し、読者の皆さん自身が実践現場の課題に対応したテーマを設定し、介護研究を始めるきっかけを得ることを目的にしています。

第5回では、データ収集と分析を始めるための一歩として、研究データとは何かを解説した上で、量的・質的調査の方法・分析について紹介しました。本連載の展開に沿って研究活動を進めている読者の皆さんは、これまでの研究プロセスを通して、何らかの「結果」を得ていることでしょうか。この「結果」は、調査・分析を通して得たものであることは言うまでもありませんが、大切なことは、第1回において設定した研究テーマの「問い」に対する答えと言えるかという点です。

最終回となる今回は、これまでの研究プロセスの「到達点」として、研究活動・内容を発表することの意義とその方法について概説します。

### 研究発表の意義

では、まず、これまでの研究プロセスを振り返ってみましょう。先述したように、研究プロセスでは、皆さんが設定した研究の「問い」から始まり、それに対する何らかの「答え」を得ることが大切です。そし

て研究発表では、こうした問いの設定から答えを見いだすまでの過程を、研究テーマや目的、研究の背景、研究方法と結果、考察および今後の課題などと順序立て、論理的に他者に分かりやすく伝えることを目指します（表）。

発表を行うに当たり、あらためて考えてもらいたいことがあります。それは、介護現場においてなぜ研究が必要とされているのか？ という点です。本連載の第1回では、この問いから出発しました。

介護現場では、研究活動を通して、利用者の対応やさまざまな実践を支える「もの」「方法」「言語」などが生み出されています。そして、こうした研究活動の発表により、研究成果が介護現場において必要不可欠なさまざまな「かたち」となって存在しています。また、こうした介護現場で直面している「何らかの問い」をチームで共有し、困り事や関心事について話し合うなど、研究活動においてさまざまな対話を繰り返し広げることが、チームケアの質向上に大きな効果を見いだしています。

このような成果は、内容によって、皆さんが所属する介護現場や介護事業特有の結果であったり、どの介護現場でも共通して抱えている課題に対応した普遍性のある結果であったりします。この点を踏まえると、

## 表 一般的な発表項目例と流れ

<ol style="list-style-type: none"><li>1. 研究テーマ</li><li>2. 研究目的</li><li>3. 研究の背景</li><li>4. 先行研究の検討結果</li><li>5. 研究方法<ol style="list-style-type: none"><li>①研究対象</li><li>②研究内容</li><li>③研究期間</li><li>④研究方法 (手法)</li></ol></li><li>6. 倫理的配慮</li><li>7. 結果</li><li>8. 結果に基づく考察</li><li>9. 今後の課題</li><li>10. 引用文献・参考文献</li></ol>	<ul style="list-style-type: none"><li>✓研究テーマは、主題だけでなく副題をつけることで具体化します。</li><li>✓研究目的と背景を分けにくい時は、「研究目的と背景」をまとめることも方法の一つです。</li><li>✓先行研究の検討結果は、研究の問いに対し、分かっていること、分かっていないことを整理して示します。</li><li>✓倫理的配慮が明記されていない場合、研究発表はできません。</li><li>✓結果と考察を区別して書き分けることが重要です。特に、結果は研究に対する客観的な結果であり、解釈や意見を踏まえてはいけません（それらは考察に）。</li><li>✓文献は、引用したものと参考にしたものを分けて整理しましょう。</li></ul>
--	---

これらの研究成果を広く共有することにより、普遍的な課題に対応した取り組みへの発展が期待できます。また、各事業所の特性に応じてさらに工夫を重ねることにより、より大きな効果を生み出すなど、広い意味で介護現場の質向上に貢献することが期待できます。

介護現場における研究の意義は、まさにこうした研究成果を広く共有することによって、利用者など介護の対象となる方々はもちろん、皆さんが所属するチームのチーム力の向上や技術の獲得につながります。そして、それらの効果を共有しながら、より高い成果や新しい課題の発見・対策を講じる手立てを得られるなど、大きな社会的な意義があるのです。

### 研究発表の方法

研究発表は、研究成果を多くの人に分かりやすく伝えることが目的であり、一般的には、口頭による発表と、論文としての発表の2つが代表的です。

今回は、初学者にぜひ経験してもらいたい「口頭発表」について取り上げ、そのポイントを解説します。

### ■ どれだけの成果があれば発表できるの??

研究成果は、「分析結果に基づく考察がなされ、今後の課題が明らかになった段階」であれば、その大きさや量に限らず、発表する意味を見いだすことができます。しかし、研究発表は、研究活動の努力の成果を発表する機会ではあっても、「こんなに頑張りました」といった、頑張ったことを言うための報告会ではないことを自覚しなくてはなりません。あくまで、研究目的に沿って行われた方法と、その結果に基づく考察を発表する場であり、これらを他者に分かりやすく伝えることを心がけ、発表に臨みましょう。

### ■ 発表に向けて何を準備したらよいの??

近年、研究発表の方法は、スライドを活用したプレゼンテーションが一般的です。従来使用していたOHPに変わり、Power Pointなどのプレゼンテーション用ソフトを活用したものが多く見られます。ここで使用するスライドは、あくまで口頭による発表を補足するための視覚的資料であり、発表する内容すべて（原稿）を盛り込む必要はありません。見やすさを重視し、なるべ

く大きな字で箇条書きにまとめたり、図表を用いたりすることで、視覚的な理解のしやすさを確認しながら、作成を進めましょう。

また、こうした発表内容の一覧を概略的に網羅した冊子として、発表抄録集や発表要旨集が作成されることも忘れてはなりません。研究発表の申し込みに当たっては、まずこの発表抄録や発表要旨によって発表の可否が決まるため、この作成に力を入れることは極めて重要です。

これらは、発表する大会によって記載する項目や字数が異なりますが、おおむね先に示した「一般的な発表項目例と流れ」(表)に該当する内容で共通しています。この点からして、研究発表は、すでに結果を得て考察された段階でなければ申し込みをすることが難しいとも言えます。多くの研究発表の中から皆さんの研究発表を見もらうためにも、「この内容はおもしろそう!」という印象を与えられるテーマ設定や、「この問題意識はうちと一緒だ」といった共感を得られるような目的や背景の提示を目指しましょう。

## ■どのような発表練習をすればよいの??

発表資料の作成と合わせて、発表原稿を作成することが重要です。筆者の経験的には、慣れてくると箇条書きのメモでも発表原稿として活用できるようになってくると思います。しかしながら、発表時間に決まりがあることを踏まえると、与えられた時間内でどのようにポイントを押さえて発表するかを吟味し、せっかくの発表がタイムオーバーすれすれとなり、たたみかけるような早口で終わってしまった、などということにならないようにしたいものです。

また発表は、発表者の声のトーンによっ

ても、与える印象が大きく変わります。淡々と原稿を読んだり、自信なく話したりする姿は、聴き手に悪影響を与えるだけでなく、発表する研究内容そのものの評価にもつながるため、自信を持って話せるよう準備をしましょう。

さらに、発表後に聴衆者の質問に答えることも、大切な役割となります(おおむねどの発表も質問の時間が設けられています)。こうした質問では、発表内容の具体的(詳細)な結果を求められたり、類似する研究や成果との違い(この研究ならではの特徴)について問われたりすることが多くあります。また、研究内容や結果について、何らかの指摘を受けることも少なくありません。こうした質問に対応するためには、発表する研究内容だけでなく、研究活動で活用した資料を手元に置き、それらに備えることも重要ですが、明確な返答が難しかったり、ここでの指摘によって新しい知見を得たり、気づいたりすることもあるでしょう。このような場合は、「ご質問、ご指摘をありがとうございました。いただきましたご意見を今後の研究に役立てたいと思います」など、御礼を踏まえて無理のない返答をすることも発表者に求められるテクニックの一つです。

このような話をするすると研究発表が怖く感じられるかもしれませんが、こうした指摘によって研究の意義がより大きく見いだされるため、発表時に受ける質問や意見は、皆さんの研究成果をよりはっきりと、大きな手ごたえに導いてくれるはずです。

## 発表経験が 介護現場に与える効果

それでは、発表経験が介護現場に与える

効果には、どのようなものがあるのでしょうか？ 発表を経験した2事業所の事例を紹介したいと思います。

## ■事例① 人材育成の取り組みを研修会で発表！

介護老人保健施設ユニケア岡部

3階介護フロア長 磯邊清孝氏

### 「取り組みの見直し」を図るために

当施設は、開所時から「業務優先」ではなく「利用者介護優先」の職場づくりを目指しています。しかし、「仕事がうまく回せない」「時間に追われて大変」「私には無理」といった理由から退職する人もおり、介護職員の人材育成を重点課題として位置づけて取り組んできました。新人・中途の採用を問わず入職した職員に不安なく勤めてもらうため、6年前から「新人教育ファイル」を導入しました。どこのケアユニットであっても、プリセプターは必ずこのファイルに沿って新人教育をすることになりました。

今回、今まで実践してきた過程を一度振り返り、見直す機会として、日本介護福祉士会東海北陸ブロック研修会で発表することを思いつきました。発表し取り組み内容を公開することで、外部の方から評価を受けたり、他施設における人材育成の取り組みを知ったりするなど、施設にとって良い刺激の場になると思いました。

### 発表は施設の代表という意識を持って！

研修会での発表となると施設を代表しての発表となりますので、委員会の分析や見解だけで発表するわけにはいきません。あらためてケアユニットのさまざまな職員の介護職員や、上司である副施設長などの意見も聞き、実際の取り組み内容と発表内容

に相違がないかなど、丁寧に確認することを心がけました。この過程で、周囲も、“私個人”ではなく、「施設の発表であること」の意識が高まっているように感じました。**発表時間を考えた的の絞り込みが重要！**

発表時間は20分でした。この限られた時間内で、どのような内容をどう伝えるべきか委員会で何度も議論し、発表原稿の内容を絞りました。また、発表内容を効果的に伝えるには、画像や図の上手な活用が大切だと考えました。そこで、口頭での発表だけでは複雑な説明になってしまう箇所などは、実際に使用した「新人教育ファイル」を画像に取り込み視覚で理解してもらったり、仕組みづくりの部分を図式化したりしました。

### 発表後の会場の意見・質問が

### 大きな手ごたえに！

発表後、会場からはいくつかの質問をいただき、閉会後も個別に聴講者から声をかけていただくなど想像以上の反響があり、取り組んできた人材育成のあり方が評価されたことに喜びを感じました。その後も複数の事業所から施設見学の依頼が続くなど、私たちの人材育成に対するモチベーションがさらにアップすることにつながり、現在に至っています。

## ■事例② 法人内研究発表会として、なんでも発表会を開催！

介護老人保健施設梅名の里

看護師長 富原静子氏

施設ケアマネジャー主任 千野智恵子氏

### 開催の狙いは、法人全体の結束力の強化！

当施設は老人保健施設（以下、老健）を母体とし、通所や訪問系を運営する大規模施設であり、「地域と共に暮らす梅名の里」

を理念に掲げ、各事業所がそれぞれに利用者のニーズに合わせたケアの提供に努めています。

しかし、同グループ内とはいえ、法律上の名称の違いや役割の違いは知っていても、それぞれの業務内容の細かいところまではなかなか知る機会を持たずにいました。そこで、仲間意識を持つことで顔の見える関係性を築いたり、発表を経験したりすることを通して人材育成につなげることを目的として、2015年に年1回の「なんでも発表会」を発足させました。

### 「なんでも」よいということの意義！

“なんでも”というからには、どんな内容でもよいのです。全国老人保健施設大会で発表するためのプレ発表の場として活用し、発表内容の修正を行ったり、質問に答える訓練をしたりすることもあれば、その事業所が独自で行っているケアの内容をまとめ、他事業所の職員に知ってもらったりすることもあります。2016年度は、デイサービスでは、夏祭りや流しそうめんを楽しんでいる様子を発表しました。入所棟では、入職して1年目の介護職員が初めて経験した看取りについて発表しました。

発表する職員の経験年数や職種はさまざまです。先輩の落ち着いた発表を学び、若手職員の緊張感を共有する場になります。また、不慣れでも一生懸命発表する様子や、場を盛り上げようとする様子など、その違いもおもしろいものです。

### 発表会がさまざまな刺激に！！

入所棟の新人職員が発表した看取りケアについては、新人が発表したということや、他事業所ではなじみのない「看取り」というテーマだったことから、大きなインパクトがあり、好評でした。発表した本人

は、達成感を感じることができたようでした。また、新人職員が発表したことで、中堅やベテランの職員も刺激を受け、全国老人保健施設大会での研究発表にも積極的に取り組む姿勢が見られるようになりました。

この「なんでも発表会」は、参加した全職員から、発表内容が良かった事業所に点数をつけて投票してもらう仕組みです。上位入賞者には賞状と景品が授与されることになっており、楽しみも広がります。順位発表は毎年好評で、職員のモチベーションアップにもつながっていると考えます。

### 発表が職員のモチベーションアップに！

なんでも発表会で「発表を経験する」ことは、人に伝わる話し方や発表内容のまとめ方を考える場となり、発表する職員の成長につながると考えます。また、施設全体の仲間の活動を知ることができ、連帯感の醸成や、参加する職員のモチベーションアップにもつながっていると感じます。

発足して3年目となりますが、ほかの研修や参加するだけの研修よりも大変ではあるものの達成感も大きく、発表することを楽しく学べる機会となっており、今後も継続して行っていきたいと考えています。

### まとめ

いかがでしたでしょうか？ 今回紹介した事例は、いずれも発表経験が「実践の意義を確認する」機会として、極めて効果的であったことを表しています。また、こうした活動が「施設職員のモチベーションアップ」に影響を与え、チーム力の向上につながっていることも表しています。このことは、介護研究の意義として高く評価すべき取り組みです。

人材育成について取り組んだ磯邊氏の内容は、筆者自身が座長を務めた分科会での

発表でした。会場内では多くの参加者が問題意識を共有し、自分たちの施設の参考にしたいと、数多くの意見や質問が飛び交いました。

富原氏の事例では、法人内での研究発表会の取り組みについてご紹介いただきました。これを通して、施設全体の活動を知る機会を得たり、研究活動を法人全体で共有することによって連帯感を醸成したり、参加する職員のモチベーションアップを図ったりできるなど、高く評価すべき成果が得られており、読者の皆さんの法人においても取り組みの手がかりとなる内容であったと思います。

介護研究を発表する場合は、各種の学会を

はじめ、日本介護福祉士会や全国老人福祉施設協議会、全国老人保健施設協会などの全国大会やブロック研修会など、実に数多くの機会が存在します。こうした場で皆さんの研究成果に出会い、研究の意義を見いだすべく熱い議論ができることを楽しみにしています。学会や研修会でお会いしましょう。

#### 引用・参考文献

- 1) 前田樹海：この1冊でできる！ はじめての看護研究，ナツメ社，2015.
- 2) 田中千枝子編集代表，日本福祉大学大学院質的研究会編：社会福祉・介護福祉の質的研究法—実践者のための現場研究，中央法規出版，2013.
- 3) 矢原隆行：はじめての介護研究マニュアル—アイデアから研究発表まで，保育社，2002.
- 4) 佐藤眞一：すぐに役立つ事例のまとめ方と発表のポイント（おはよう21ブックス 基礎から学ぶ介護シリーズ），中央法規出版，2006.